

インターンシップの質向上 における「協働型」の可能性

2014年7月28日

インターンシップ等実務者研修会〔九州地区〕

高知大学・池田啓実

CBI授業体系と開講意図・内容



CBI実践10年の歴史

実習通期(年)	特徴
第1期(2005年)	<ul style="list-style-type: none"> 現代GP(2004年採択)のプログラムとして初の実習。GP申請時は、学生が考案した課題解決策が受入先ニーズに合致することが「協働」との認識にあったため事前学習の狙いもこの課題解決策の企画立案とし、授業名も「CBI企画立案」とした。 第1期の実習は'04年&'05年でCBI企画立案を受講した31名が対象。第1期は、試行ということで首都圏も1カ月の期間から受け入れてもらった(首都圏;6か月3名、2か月2名、1か月1名、高知;6か月2名)。
第2期(2006年)	<ul style="list-style-type: none"> 第2期は、事前学習を19名が履修。事前学習の内容は、前年度の反省に立ち、「志の醸成や企業活動の理解に力点」を置いた内容に修正。結果、8名が半年間の首都圏実習を選択。第1期と比べ、質量ともに向上した。
第3期(2007年)	<ul style="list-style-type: none"> 第3期は、実習地を高知、首都圏に加え、実習ケアの依頼ができる機関と提携できた岐阜も対象に追加。結果、32名の事前学習受講生のうち、首都圏6か月4名、岐阜6か月2名、高知6か月2名、高知2か月2名、高知1か月3名の計13名がCBI実習を選択。
第4期(2008年)	<ul style="list-style-type: none"> 事前学習は、自律化支援の色合いが強かったことやCBI実習選択意思の有無を重視しなかったこともあり、CBI実習を希望しない学生の受講がかなりの割合を占めるようになったため、履修者数が40名にまで膨れ上がる。第4期の実習は大阪も実習対象地に追加。首都圏6か月2名、大阪6か月2名、大阪1か月1名、高知6か月2名、高知1か月2名の計9名がCBI実習を選択。
第5期(2009年)	<ul style="list-style-type: none"> 第5期では、新たな試みとしてCBI企画立案をCBI実習と地域協働実習で共有する方式を採用(問題が多く1期中止)。高知の中山間地域での実習を選択した学生は、CBI実習ではなく地域協働実習として単位化する(CBI実習は首都圏のみを対象)方式に改訂した結果、首都圏実習は1名、地域協働実習(県内1か月実習)選択は3名に止まった。
第6期(2010年)	<ul style="list-style-type: none"> 第6期の実習は事前学習はまだ学生の自律的思考行動醸成の機能も担うという位置づけで実施。よって、CBI実習選択を前提とはせず受講生募集。ただし、事前学習の内容は選択率向上を企図し、大幅に改訂。受講生間の相互信頼の醸成が実習選択に必要な「本気と覚悟」を醸成するとの思想で授業を制度設計し実施。結果、26名中、首都圏実習を選択した学生がこれまでで最大の12名(受講生のほぼ半数)に上った。
第7期(2011年)	<ul style="list-style-type: none"> 事前学習の内容は第6期を踏襲。第7期からは、NPO法人ETIC、のサポートがある首都圏のみに限定。結果、第7期も事前学習受講生の約半数の6名がCBI実習を選択し準備を行っていたが、3月11日の東日本大震災、その後の原発事故の発生により3名が実習開始を断念
第8期(2012年)	<ul style="list-style-type: none"> 第8期も第6期の実習の内容を踏襲。しかし、CBI実習選択を受講条件としないことが、多くの受講生に実習を選択しない理由を探させる思考行動をとらせることに。こうした状況から学生の信頼関係醸成もうまくいかず、覚悟を持った本気を十分に形成できなかったこともあり保護者の説得に失敗した学生も複数名あり。最終的に、実習選択は1名という厳しい結果となった。「我々の覚悟の無さ」が原因との総括。
第9期(2013年)	<ul style="list-style-type: none"> 受講者数の激減も覚悟し、CBI実習選択を前提とすることを事前学習の受講条件として明確化。授業内容も大幅に改訂。結果、初めて事前学習受講生全員(7名)がCBI実習を選択。実習選択を反対する保護者はなく、逆に、尻込みする学生の背中を押す保護者まで出現。
第10期(2014年)	<ul style="list-style-type: none"> 2年連続で、事前学習受講生9名全員がCBI実習を選択。9名中8名が高知県内高校出身。外から高知を一度見てみたいとの思い強し。

CBI実践から得た、ある“気づき”

- ① 実習の長さは、インターンシップの質保証の一要件に過ぎない。
- ② インターンシップ成果の質は、学生と受入先双方の「本気と覚悟」の醸成度に強く影響を受ける。



実習期間が短くとも、「本気と覚悟」を双方が満たすプログラムならば、高い成果を得る可能性は大



協働型インターンシップ

(CSI; Collaboration Style of Internship)

協働型システムの成立要件

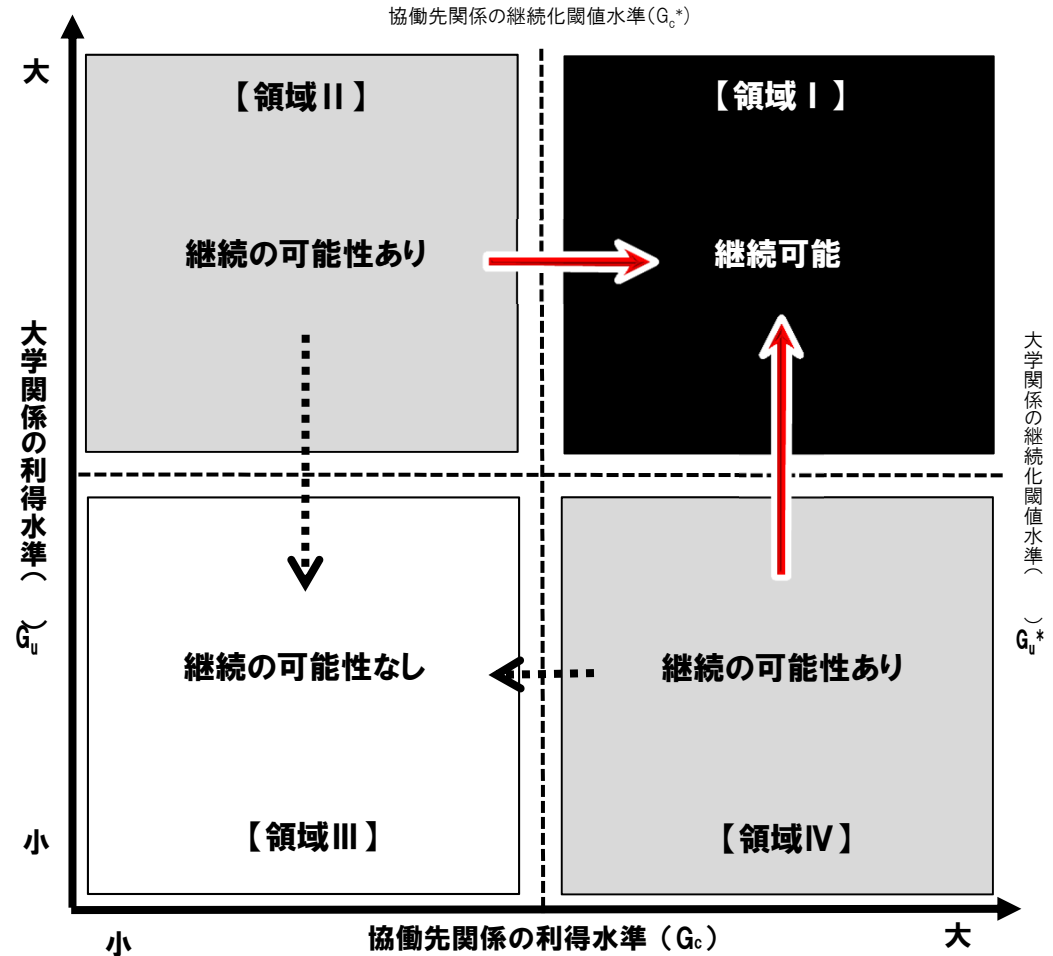
①制度の設計・運用に関わる思想要件(思想要件)

「すべての関係者の利得が好循環的に実現する制度の設計」

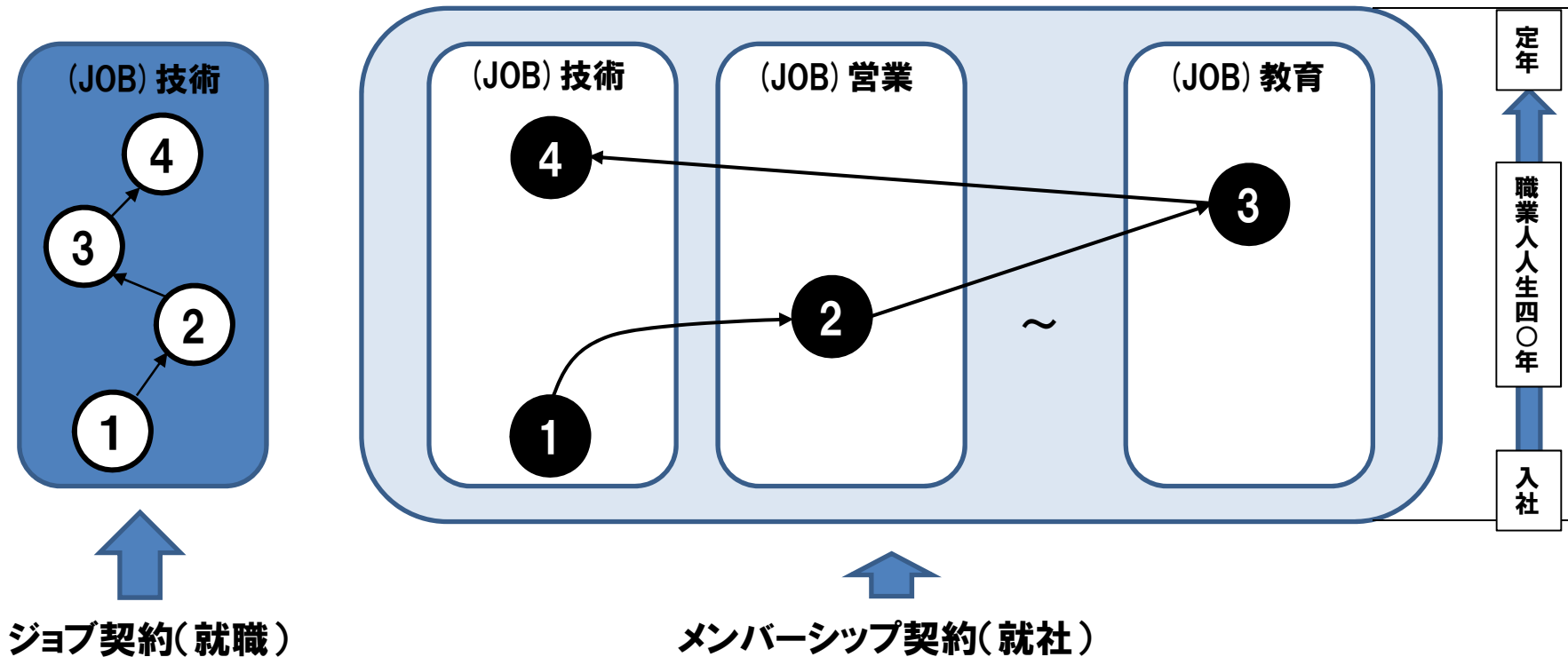
②制度の設計・運用に関わる能力要件(能力要件)

「関係する機関が対等平等な関係で実践できる体制と方法の存在」

協働型システム継続の条件

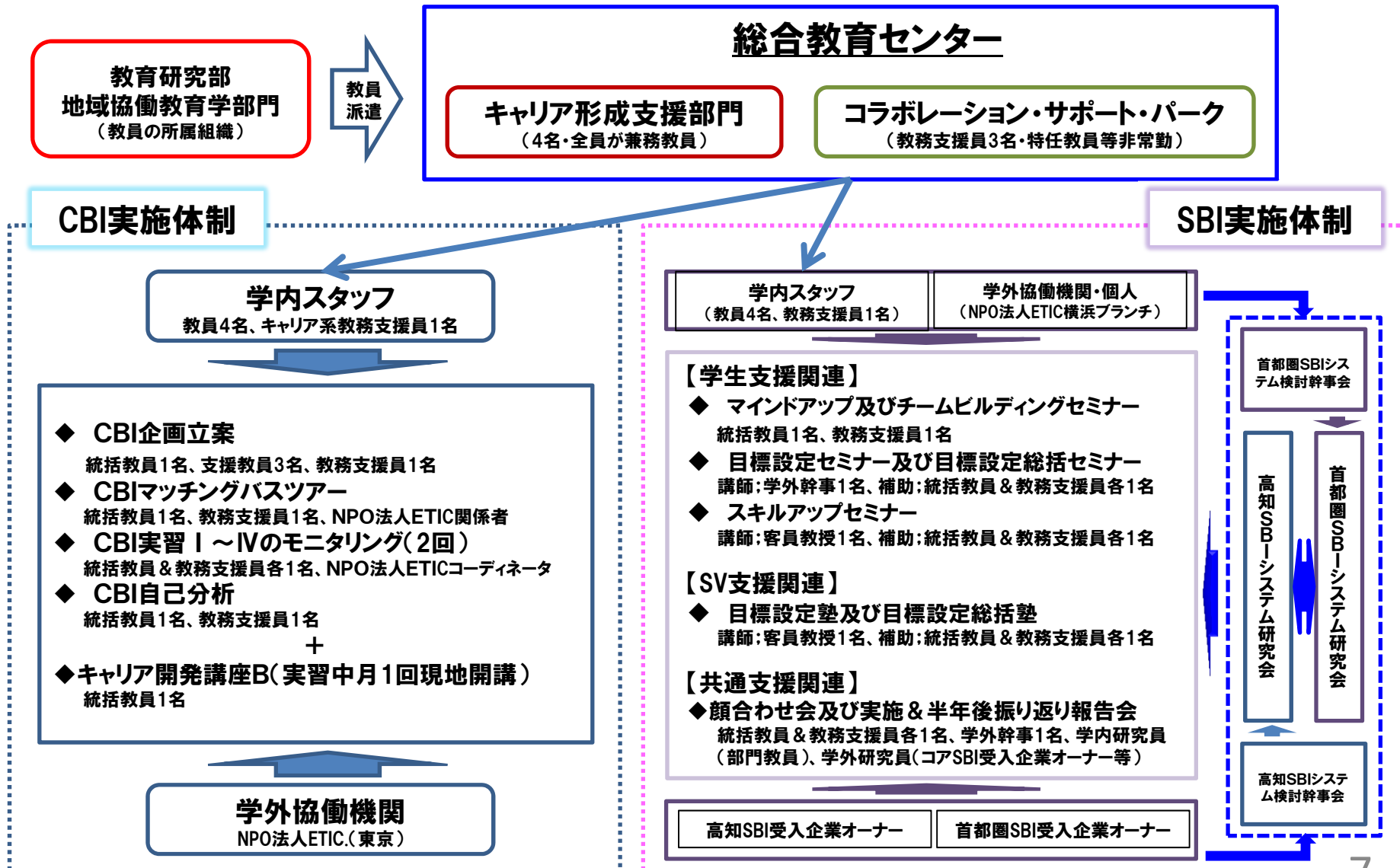


「メンバーシップ（MS）契約」とインターンシップ（IS）

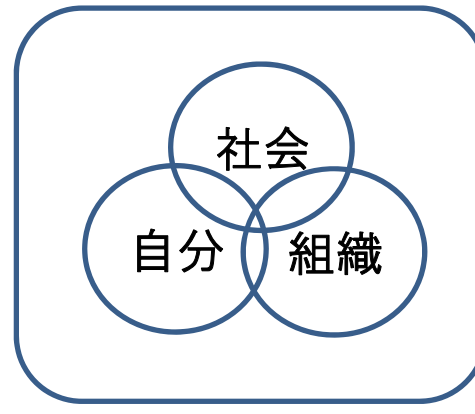
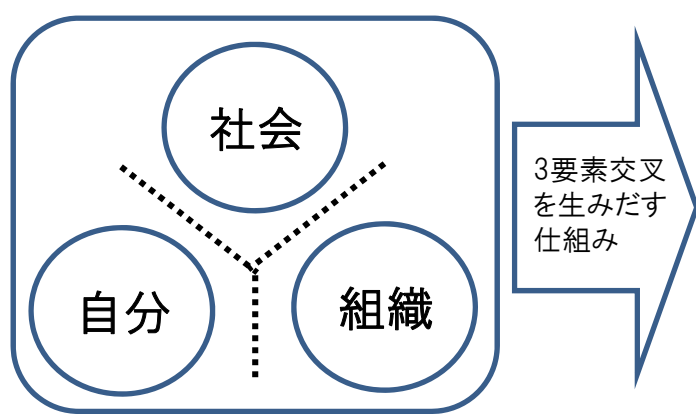


1. 社会の多くの組織は、メンバーシップ契約に基づく人事制度を採用。この制度の利点は、様々な職種経験を通して、そのプロセスを各職場の関係者が長期に亘って観察することで、当人にとっても組織にとっても適した仕事を見出し、真に取り換えが利かない人材を養成できる点にある。
2. アルバイトは、基本、「ジョブ契約」の体感。よって、学生がアルバイトで日本の組織活動を理解することは難しい。
3. インターンシップはやり方によってはメンバーシップに対応する仕組みになる可能性がある。条件は、①組織の日常的業務を実習内容のコアにすること、②体験の内省支援を行う2点にある。これによって、日本社会での働き方や協働するための他者の巻き込みポイントを体感し、その経験知を内省によって知識の源泉である「暗黙知」へと転化させることができる。

CBIとSBIの実施体制

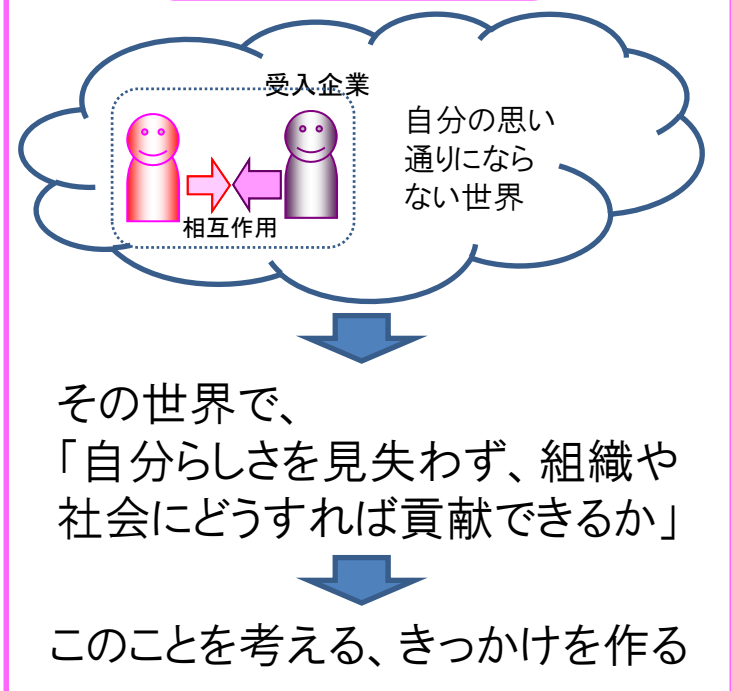


參考資料

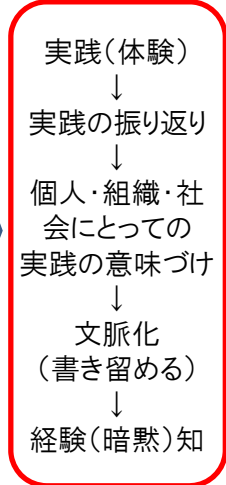
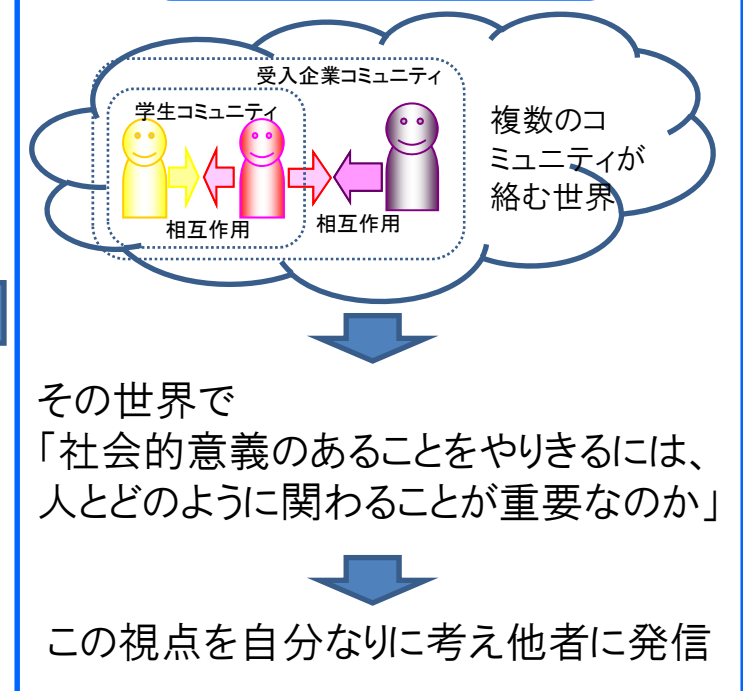


3要素(自分・組織・社会)
が交叉する仕組みの肝
↓
相互の「本気」「覚悟」

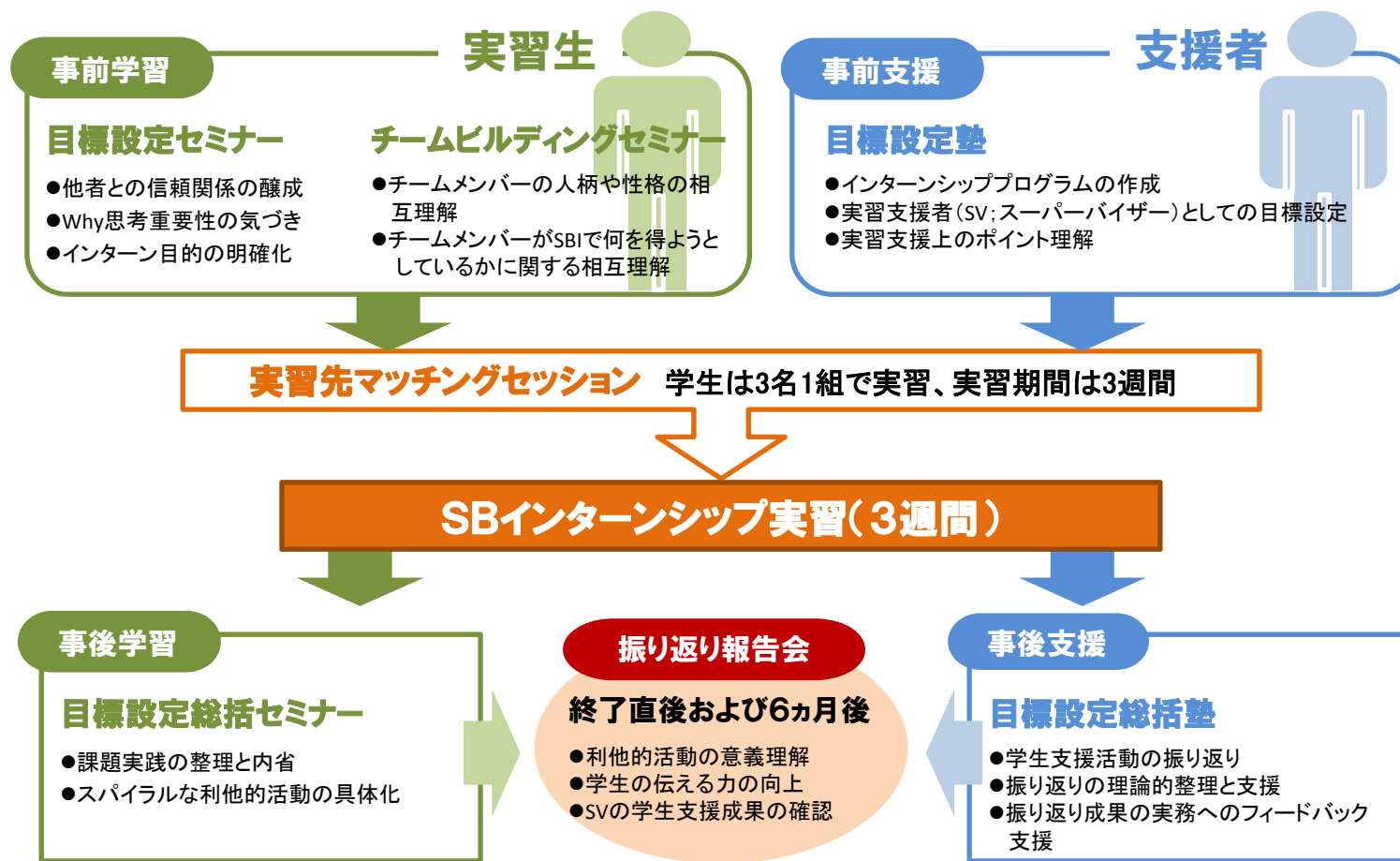
CBI(半年間の実習)
社会協働インターンシップ



SBI(総計180時間)
人間関係形成インターンシップ



人間関係形成インターンシップ(SBI)の概要図



1. 上記の図は、高知大学が内閣府の受託研究(H22～H23)で開発してきた人間関係形成インターンシップ(SBI; Society Based Internship)のプログラム構成図
2. 基本コンセプトは、①参画するすべての協働者が「本気」で取り組める仕組み、かつ②本気の取組が醸成する相互信頼関係の形成にある。学生の本気は、事前学習による支援に始まり、3人一組でのインターン、実習終了後の報告会、さらに、その後半年間に亘って行う月1回の振り返りと6ヶ月目の再度の報告会の実施で醸成。支援者サイドは、15日間の振り返り(面談)支援、日報へのコメント記入や報告会への参加を通して形成する。なお、両者の本気形成のための支援として、上記のセミナー(学生向け)と塾(支援者向け)を実施
3. このプログラムでは、最終的に、実習生と支援者の同時自律化形成を目的としている。⇒ 大学と企業間の信頼関係の形成

SBIプログラムの特徴

① 目的

1. 受入先;社内の人材育成
2. 学 生;人間関係形成

② プログラムの特徴

1. 3人一組による3週間の実習 & 同一期間での実施
2. マッチングの廃止
3. 本気と覚悟の醸成
 - 学生
 - 事 前;登録時に登録動機について面談と各種セミナーの実施
 - 実習中;初日研修、1週間目のモニタリング
 - 事 後;半年に亘る実習経験の内省(総括セミナー、月1回のTea Time
3か月目のSV訪問、6か月後報告会開催)
 - SV
 - 事 前;目標設定塾、実習生との事前顔合わせ、SV交流会
 - 実習中;1週間目のモニタリング
 - 事 後;総括塾、3か月目SV訪問、6か月後報告会

CBIとSBIの目的・機能等の比較表

	項目	CBI(長期社会協働インターンシップ)	SBI(人間関係形成インターンシップ)
学生サイド	習得を目指す能力	社会力の向上	組織の運営にとって人間関係がどのような重要なかを体感し、その肝を理解する。
	IS後の期待する行動	形成した社会力をベースに、大学において社会的課題解決を目的とした活動を展開する。(新規に組織立ち上げ、既存組織活用いずれも可)	所属するサークルの活動やアルバイトでの働き方にフィードバックする。さらに、サークル活動については所属する組織の質的変革を目指す。
	単位認定	【単位認定あり】 <ul style="list-style-type: none"> ➢ CBI 企画立案(事前学習);2単位 ➢ CBI 実習Ⅰ～Ⅳ;8単位(20日実働毎に2単位) ⇒ 実習の単位認定にはCBI自己分析の受講が必須条件 ➢ CBI 自己分析(事後学習);2単位 【実習単位の認定方法】 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 2回の企業モニタリングによる評価の聞き取り(他者評価) ➢ CBI自己分析による実習の内面化(成果と課題の自覚化)の質内面化成果の他者報告とテキスト化 	【単位認定なし】 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 実習希望者に「本気と覚悟」を求める方策として敢えて単位化せず ➢ 能力変化ではなく実習生の人間関係形成に関わる肝の自覚化促進が狙い ⇒ 実習終了後も以下の支援策を実施 <ul style="list-style-type: none"> ◇ 複数チーム合同によるTea Time(月1回)の自主開催 ◇ 中間SV訪問(3か月目)と訪問成果のテキスト化 ◇ 「半年振り返り成果報告会」での報告と成果のテキスト化
企業サイド	実習内容の特長	新規事業などのプロジェクト実施(主に東京) 地域活性を企図した企業との協働プロジェクトの実施(主に横浜) 日常業務への従事 日報作成	日常業務への従事 実習後半の時期に短期のプロジェクト実施 日報と毎日の面談 実習支援者(SV)自身によるPDCA資料の作成
	期待する成果	新規事業の立ち上げ 新入社員支援のノウハウ蓄積 日常業務の見直し	若手社員の自律性・社会力の資質向上 日常業務の見直し 人材育成を重視する企業オーナー等とのネットワーク化 実習支援者(SV)同士のネットワーク化
	実習支援者(SV)評価	SV評価なし	【SV評価あり】 <ul style="list-style-type: none"> ➢ 実習2週目時期の学生及びSVモニタリング ⇒ 学生への聞き取り内容を踏まえたSV活動に対する助言 ➢ 目標設定総括塾による実習支援成果と課題の内面化支援(成果と課題の自覚化) ⇒ 企業オーナーへのフィードバック

1. CBI;長期社会協働インターンシップ(Collaboration Based Internship)の略称。実習期間は半年、実習地は東京ないしは横浜。実習先は、原則、NPO法人ETIC.のプログラムに登録している企業。
2. SBI;人間関係形成インターンシップ(Society Based Internship)の略称。実習期間は3週間(夏季休暇ないしは春季休暇)、実習地は高知と横浜。事前学習と事後学習を合わせプログラムの総時間数は180時間超。学生支援とは別に、実習支援者(SV)向け支援プログラムを実施する点に特長がある。
3. 社会力;門脇厚司氏が提唱した概念で、「社会(組織)を作り、社会(組織)を運営し、変革し続ける力」(門脇厚司(2007)『子どもの社会力』岩波新書, pp.59-72 参照)

協働型インターンシップの基本構造

